

知っておきたい キーワード

KEY WORD

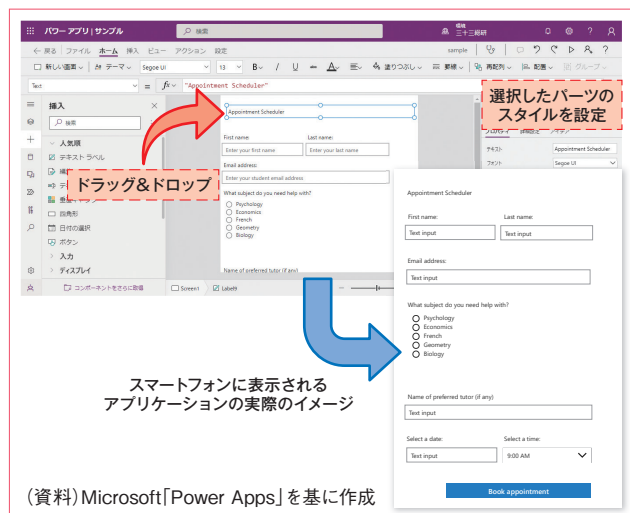
DXを加速する「ノーコード／ローコード」

経済産業省は、デジタル技術で業務全体を変革する「デジタルトランスフォーメーション（DX）」を実現できなかった場合、2025年以降に年間で最大12兆円の経済損失が生じる可能性がある」と警鐘を鳴らしており、これは、いわゆる「2025年の崖」と言われています。DXを実現する上で重要なポイントの1つとされるのが、アプリケーションやシステムの開発および導入の迅速化と、それを実現するためのシステムの内製化です。そこで、アプリケーション開発における新たな手法として広がっている「ノーコード／ローコード」の普及が、DXを加速する一つの解になると期待されています。

ノーコード／ローコードとは、いわゆるプログラミングを行わず、もしくは必要最小限のプログラミングによってアプリケーションを開発できる仕組みです。これまでのアプリケーション開発（プロコード）は、外部のシステムインテグレータなどへ外注し、専門スキルを持ったエンジニアがプログラミング言語を用いてソースコード（プログラム）を記述することが一般的でした。ノーコードは、ツールに用意されているパーツやテンプレート（予め用意されているデザインやレイアウト）を直感的なドラッグ＆ドロップ操作で組み合わせたり、メニューリストをクリックしてパーツの見た目や大きさなどを変更することでアプリケーションの開発を可能とするものです（図表1）。ローコードについても、最小限のプログラミングが必要となるものの、本質的にはノーコードと同じであり、より拡張性の高い機能を備えたアプリケーションを開発できます。

近年、多くの企業がノーコード／ローコードに注目しており、それを実現するためのプラットフォームの導入が加速しています。ITおよび通信分野に関する調査・分析を行うIDC Japan(株)によれば、国内におけるノーコード／ローコードプラットフォーム導入率は2020年8月調査（回答社数435社）では8.5%であったものの、2021年9月調査（回答社数485社）では37.7%と1年で大幅に上昇しました。同社では、2023年には新規開発されるアプリケーションのおよそ6割がノーコード／ローコードになると予測しています。なお、ノーコード／ローコードのプラットフォームを使用すればすべての要求を満たすアプリケーションが開発できるわけではありません。ノーコード／ローコードのメリットやデメリット（図表2）を理解し、そのメリットが享受できる体制を整え上手く活用すれば、企業のDX推進のみならず、IT人材不足の解消や個人のITリテラシー向上など様々な恩恵を得ることができ、結果として「2025年の崖」を回避することにもつながると期待されます。

図表1 ノーコード／ローコードツールの開発イメージ



図表2 ノーコード／ローコード開発のメリット・デメリット

メリット
開発期間短縮 ・プログラミング開発では最低でも数か月以上の開発期間がかかる一方、ノーコード／ローコード開発は、簡単なアプリケーションであれば数時間でリリースできるものもあり、開発期間を大幅に短縮できる。 ・リリース後のユーザーの反応を見ながら即時に改修することができ、顧客や従業員の満足度向上にもつながる。
コスト削減 ・開発期間を圧縮できることから開発にかかる工数を削減することができ、設備費を含む開発コストの削減につながる。 ・プログラミング開発が行える技術者にかかる人件費や外注費を削減できる。
プログラミング知識なく開発可能 ・ソースコードの記述が不要なためプログラミング開発のスキルを持たない非技術者でも開発を担い、担当者の手で現場のニーズに沿ったものを作ることができる。
デメリット
低いカスタマイズの自由度 ・一部プログラミングを行う部分もあるものの、大部分はプラットフォーム上に用意された機能単位を組み合わせて開発するため、一からプログラミングで開発を行う方法に比べると自由度は下がる。
ある程度必要となる経験とスキル ・プログラミングのスキルはあまり求められないものの、トラブルが起きた際に対応できる経験と知識を持つ技術者が必要となる。
プラットフォームへの依存リスク ・使用するツールに依存することとなるため、デザインや機能、セキュリティ面で制約が出てくる場合がある。 ・ツールの提供が終了すると、開発したものが使用できなくなる恐れがある。

(資料)各種資料を基に作成

三十三総研 調査部 研究員 佐藤 聡一郎